2025.02.08
JLAU 関西ランドスケープセミナーVol.8
小松良朗×鈴木マキエ講演会「BEYOND THE BORDERS」



【開催概要】
日時：令和 7 年 2 月 8 日（土）10:00~12:00
場所：オンライン（Zoom）＋部会メンバー・招待者のみ現地（ナレッジサロン）
講師：小松良朗（日建設計）　鈴木マキエ（GGN）
参加者：現地 20 名＋オンライン 110 名
主催：（一社）ランドスケープアーキテクト連盟　関西ランドスケープセミナー部会

今年度の JLAU 関西ランドスケープセミナーは昨年に引き続き参加者にはオンライン配信、部会メンバー・招待者は会場でのハイブリット形式にて開催いたしました。今回は日建設計の小松良朗氏と GGN Landscape Architecture の鈴木マキエ氏をお招きし、2024 年に先行街開きが行われた「グラングリーン大阪」の話題を中心に、質の高いランドスケープを生み出すためのプロセスやこれからのランドスケープアーキテクトに求められること、さらには日本と海外におけるランドスケープの違いといったお話をお聞きしました。

＜グラングリーン大阪＞
「グラングリーン大阪」は、“関西最後の一等地”とよばれる JR 大阪駅北側の梅田貨物駅跡に、緑あふれるうめきた公園を中心として、商業施設・イノベーション施設、ホテル、オフィス、住宅といった街を整備する一大プロジェクト。2013 年に開業したうめきた 1 期の「グランフロント大阪」に続き開発が進められ、9ha のうち 4.5ha は公園というターミナル駅直結の世界最大級の都市公園です。

都市間競争において緑が重要視されている中でのプロジェクトであり、「ランドスケープファースト」の考えを事業者同士が共有し、公民連携による整備を行ってきました。



場所のリサーチ

この地の何を未来につなげていきたいかを第一に考え、広域的な周辺環境からミクロなスケールまで多くのリサーチを行っていました。もとは貨物駅だったため地歴や植生など何もないと思われがちですが、深くリサーチを行えば多くのことが発見できるという点が印象的でした。リサーチを行っていく中で“No Green” City Osaka　「緑少ない大阪」でどれだけ緑を体感できる場所を生み出せるのか、淀川が近くにあることから「潤った大地」を実現していくことが計画の大きな柱となっていきました。



植生リサーチをもとにクロマツ・アカマツが植栽された
ノースパークのアプローチ

無数の緻密なスタディ

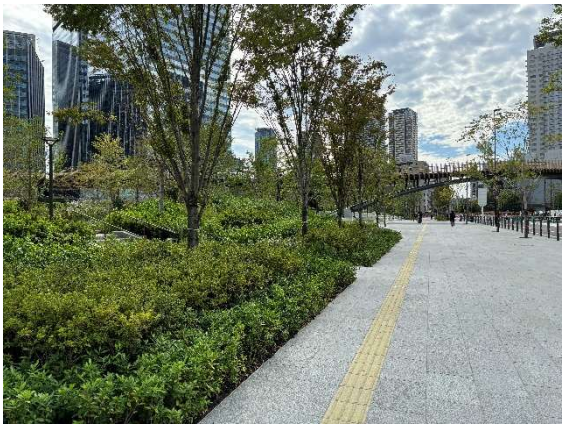
南北街区をまたがる最大 3m の高低差をもったランドフォーム（地形）はクレイモデル（粘土模型）と 3D モデル、擁壁の多い公園北側は 3D プリンターでモデルを出力し、形状のスタディを重ねていました。中央の道路に面したステッププラザの際は、もとは直線でしたが、緻密なクレイモデルを作成し検討することによって緩やかな曲線へと形状を変更し、全体の曲線とつながるオーガニックな線形を生み出すことができたそうです。そのほかにもアンフィローンシートベンチの断面形状や南側広場のプロポーション、イベント広場から見える緑と石のバランス、水盤の見えなどを無数の模型、モックアップ、スケッチでスタディすることによって、繊細な微地形や景観、ディティールデザインを作り出しています。緻密なスタディが美しいディティールを生み、居心地の良い空間を創出していることを学ぶことができました。

水平・垂直に溶け合うランドスケープと建築

うめきた公園の計画とともに街区内の建築の設計が進められてきました。街区全体の共通コードである正方形の建築の角度をそれぞれ変えることで多様な空間や景観を生み出しています。また公園の中に入っていくにつれボリュームが低層になり、ランドスケープとなじむことが意識されています。ランドフォーム（地形）と一体となって設計されているため裏がなく丘地形になじんだ建築デザインになっていることが特徴です。このような公園の風景と一体となった建築を生み出せたのはランドスケープ設計と建築設計の緻密な共創があったからであり、ここでもランドスケープファーストによる上質な空間作りを感じることができました。

日本の四季を演出する植栽デザイン

地歴や周辺環境、現状分析からどんな植栽がよいのかを徹底的にリサーチを行い、2 年がかりでまとめたそうです。淀川に近い北側エリアは自然的で水を感じるような植栽で、南側に行くにつれ芝生広場など都市的な植栽と変化していきます。他の物件だと冬季は景観が寂しくなるからという理由で常緑樹が占める割合が少なくとも 3 割といった具合になりがちですが、日本の秋の美しさを見せるために在来種を中心とした落葉樹が多く植栽されています。また多くのサクラも植栽され、日本の四季を存分に感じることのできる空間となっています。植栽の色にもこだわった「色彩ガーデン」では古くから日本人に親しまれてきたツツジやシャクナゲ、アジサイなどの在来種中心の花木類を色彩ごとにゾーンを分けて配置しています。カラーストラテジーを作成し、花がボーダー状に見えるように重なりを意識して配植したり、微地形の高低差を強調するように低木や地被類を配植しており、季節ごとに異なる表情を見せる奥行のある風景を作り出しています。

異なる植物の重なりを意識して植栽された色彩ガーデン

緑がもたらす価値の評価・可視化

グラングリーン大阪では

1. 温室効果ガスの削減　　2. 樹木による空気の浄化　　3. 温熱環境の改善

4. 生物多様性の促進　　5. 雨水流出の抑制

といった 5 つの指標を用いて包括的・具体的に数値・ビジュアル化し、環境への貢献の可視化を行っています。

設計者が自身の設計による効果や利点を事業者に分かりやすく伝えていくためにもグラフィックで可視化することが重要であると思いました。また、特にグラングリーン大阪のような再開発では社会に対しても、この開発によってどう街が良くなったのかを視覚的に表現することがその都市のブランディング向上に大きくつながるはずです。小松氏は「環境価値」「社会価値」「経済価値」を可視化することの重要性をお話しされていましたが、これはすなわちランドスケープが世の中全体に価値をもたらすことができるということだと思います。ただ設計して終わるだけではなく、それがどのような影響をもたらすのかを見極め、わかりやすく伝えていくことがこれからますますランドスケープアーキテクトに求められていくと感じました。

都市におけるパブリックスペースでは、緑をより良い未来につなげるインスピレーションとして多様な過ごし方や枠組みを設けることを意識し、人に与えられた空間ではなく、自分の居場所や過ごし方を見つけられるようなデザインが大切であるということを認識することができました。

＜アメリカをはじめとした海外のランドスケープと
**　これからのランドスケープアーキテクトにもとめられること＞**

鈴木氏からは前職の Sasaki Associates や現在所属されている GGN におけるプロジェクト、さらにはアメリカと日本におけるランドスケープアーキテクトの役割やプロジェクトの進め方の違いといったことをお話しいただきました。

海外ではプロジェクトの初期の段階からマーケティング等の専門家が参画することもあり、より多様な視点で設計を進めていく場面が多いことが日本とは異なる点でもあるそうです。その中で、空間的・場所的なアイデンティティを与えていくことがランドスケープアーキテクトの役割であるという言葉が印象に残りました。建築等ほかの設計者の意見やプランを踏まえて設計を進めていくのではなく、ランドスケープ側からの視点でいろいろ検証し、様々なステークホルダーと対等に協働していくことが重要で、そのうえできちんとデザインに落とし込んでいくことの大切さを学ぶことができました。

◆質問・意見交換

今回はオンラインでの Q&A 形式のチャットと、会場からの質疑を用いて質問にお答えいただきました。

本講演では小松氏・鈴木氏お二人の掛け合いによる貴重なお話を伺うことができ、これからのランドスケープのあり方を考えるきっかけとなりました。また講演会後には会場参加者を対象にしたグラングリーン大阪の現地見学会を行い、小松氏の丁寧なご解説のもと、実物を見ながら細かなディティールや施工上のポイントなどについて学ぶ機会となりました。

（文責：吉永）



現地見学会の様子